

地元住民の支援

松本城の救済：市川量造と小林有也

(1) 市川量造（1844～1908 年）

1868 年の明治維新後、松本城は取り壊しと荒廃という二つの危機に直面したが、松本市民の大規模な努力によって存続することができた。明治時代（1868-1912）に入り、西洋の文化や制度が取り入れられるようになると、木造の城は時代遅れのものとみなされるようになった。1871 年、松本城とその本丸跡は陸軍省に移管された。翌年、松本城は競売にかけられ、取り壊されることが地元紙に報じられた。のちに、名古屋陸軍駐屯地（鎮台）の支城として、他の城が取り壊される中、松本城は残されることになった。

城の喪失を恐れた地元の啓発家である市川量造の懇願書が県知事に提出され、少なくとも 10 年間は売却を延期するよう求めた。また、城内を公募展の会場として使用することも提案した。そして、1873 年から 1876 年にかけて、5 回の展覧会が開催された。

地元の新聞によると、最初の展覧会には 1 日に 5,000 人以上が訪れたという。美術品、工芸品、化石、道具、武器など、さまざまなものが展示された。それまでは侍や特別な客人しか入れなかった天守に、初めて足を踏み入れた人も多かっただろう。官民一体となって実現したこの展覧会は、松本城への関心を高めることにつながった。

(2) 小林有也（1855～1914 年）

展覧会が終わると、県庁は他のことに追われ、城は荒廃していった。屋根瓦は割れ、黒漆塗りの下見板は色あせ、土台を支えていた木柱は腐り始めていた。

特に松本城で問題となったのは、この柱が腐ることだった。1,000 トンの大天守の重さに土台が耐えられなくなり、城が傾いてしまったのだ。1890 年代前半に撮影された有名な写真には、松本城が大きく傾いている様子が写っている。実際には、レンズの歪みで傾いているように見えるのだが、それでも天守の土台が崩れ始め、傾いてしまったのだ。この傾きは、17 世紀に大規模な一揆を起こして処刑された農民、多田嘉助（1639～1686）の祟りだと言う人もいた。

当時、城の二の丸には松本中学校があり、小林有也という人物が校長をしていた。小林は、日々悪化する城の状態を目の当たりにし、修復に乗り出した。小林は松本城天守保存会を設立し、修理費の募金活動を開始した。1913 年、修理は完了し、小林はその使命を終えたかのように、翌年この世を去った。

松本城の保護：市民の参加

1870 年代の開城以来、松本城の保存は市民の手によって行われてきた。現在、松本城は地元の小

学校の遠足でよく利用され、毎年ボランティアによって城内や床が清掃されている。また、観光客の増加に伴い、松本城の歴史をより多くの人に知ってもらうために、城内を案内するボランティア団体も結成された。

また、松本城の観光振興や経済活性化のために、年中行事の支援や城を愛護保全する活動や、調査研究などを行う「松本古城会」が設立された。その結果、松本城をユネスコ世界遺産に登録することを目標に実行委員会が組織された。